

火を焚ける老神郷おいがみきょうに冬近し

藤田直子

(自註現代俳句シリーズ 『藤田直子集』・

平成三〇年公益社団法人俳人協会刊)

先日『藤田直子集』を寄贈いただきさっそく拝見した。藤田さんとは三か月に一度の「白熱句会」の座を共にさせていただいている。

本書に収められた作品の特色はいくつかあるが、まずは日常生活に向き合う独特の感覚をあげたい。〈黄金週間切つて鬆のある卵焼〉〈梅咲くや本を散らして家を出て〉〈蚯蚓赤し前生の咎消え難く〉など。主人を失くされた心境にも、〈水澄むや死にゆく者に開く扉〉〈地に貼りつく梅の花びら遺骨抱く〉等、独自の感覚を生かしたイメージを展開させている。心象風景的な装いも感じられる。

第二は、国内外の旅吟に秀句が多いこと。(具体的な場所は本書を読んでいただきたい。)国内では〈冬初めいびつに走る牧の柵〉〈義仲寺や梅の散り込む煙草盆〉〈神島へ胸をひらきて鷹発てり〉〈奔流の下り築へとふくらめる〉〈頭を下ぐ

るとき鬪牛の牛となる〉など写生を主体にした佳品が、海外詠では〈極楽鳥花気負ひの脚を組み替ふ〉〈蜂の巣の乾ぶや大いなる遺跡〉〈城壁は海を締め出し青ぶだう〉など独自の強い感覚を加えた秀句が多い。中でも、〈姥捨の轟々と咲くさくらかな〉〈草の根へ春雨とほる出雲かな〉には、風土感把握に加えて一種の象徴性も感じられる。詩的感興を交えた豊かな読後感を得ることができた。

一方、この穏やかな作者に〈基地の街碧すぢ揚羽は怒り肩〉〈廃炉へと働く人や冬銀河〉など社会批評の佳品があることも知った。「碧すぢ揚羽」「冬銀河」の季語が適切に働いている。

最後に、冒頭の句に触れておきたい。平成二十五年作。

「老神」とは群馬県の温泉地の名称で、「赤城山の大蛇の神が二荒山の百足の神を追い払ったという謂れ」に因むのと。 「秋麗」四周年の一泊吟行会での作という。単なる風土詠とも受け取れるが、晩秋ながらすでに火を焚いて冬の到来を受容しようとしている「老神」には、老境を意識し始めた作者の自尊と自愛のあり方が重ね見えるようにも感じられる。懐深く入り込んでくる句として印象に残った。

終戦日何度閉めても開くドア 阿部友子

(第55回現代俳句全国大会大会賞佳作より)

現代俳句協会主催による全国俳句大会は、今年は十月二十七日(土)に京都で行われた。上掲の作は、その大会賞に輝いたもの。最優秀賞と言つてもよい。作者は山口県の方。今回、応募総数は一二、二五二句の中から複数数の選者によって選ばれただけあつて、さすがに奥行き深い句だ。私は選者として、この句は逃してしまった。反省しきりである。

この句のテーマは「終戦日」。素材は「ドア」。「何度閉めても開く」という中七以下のある意味では事実の報告をつなぎに使つたような仕立ての句で、構造はシンプルだ。ドアや扉というのは、日常生活の中では家や部屋への出入りの仕切り過ぎないが、詩想としてはしばしば不可思議な世や異界などへの境界のイメージをなす。

この句を見たときに思い浮かんだのが「月光」旅館／開けても開けてもドアがある 高柳重信」と「父母の亡き裏口

開いて枯木山 飯田龍太」の二句であつた。重信の作は、「月光」という名の旅館のドアが限りなく続き、作者はどんどん異次元の世界へと入り込んでいく。超現実的な心理風景を感じさせる。龍太の句は、より現実感が濃いが、裏口の木戸が開きつ放しで、そこは亡き父母のいる異界への通用門でもあるようだ。私自身も「扉」に嵌つた時期があり、へまなすや天の扉にダリの刻 佐怒賀正美」と、歪んだ時間を天空の扉に通わせてみたことがあつた。

さて、この阿部さんの句の「ドア」は閉めても閉めても開いてしまう。日常的な事実は、古くなり単に立て付けが悪くなつていただけなのだろうが、俳句の一行として書かれると、ドアが終戦日の記憶に対して無力化してしまつている。そんな虚しさに向き合っている作者が見える。あるいは逆に、ドア自身が敗戦の記憶を封じさせまいと、閉じるのを拒否しているかのようなもある。「終戦日」がドアに対して諧謔的な落とし処として働いているとも言えよう。恐ろしい句でもあるが、秀句に巡り合えた収穫は大きい。

鬼の細胞消えてシートは莊嚴寺院 夏石番矢

(句集『鬼の細胞 Ogre Cells』二〇一八年、Cyberwit.net刊)

本書は、「2018年6月29日から7月31日までの入院生活」中の俳句四十四句と三十枚のイラストを集めた句集で、海外出版。日本語の俳句に英語訳が添えられている(英訳は夏石番矢&エリック・セランド)。あとがきに「消化器の病気と糖尿病の治療を受けた」とある。

「鬼の細胞」とはあまりにも唐突だが、おそらく作者の暗喩的な造語であろう。英語だと *ogre cells* と複数が明示されるが、日本語でも単数細胞をイメージする人はあまりいないだろう。巻頭からいきなり〈包丁突きつけられて鬼の細胞発生す〉(氷河のように鬼の細胞成長す)とあり、悪性の病巣細胞を暗示する。突然生まれた悪玉のような緊迫感もあるが、一方で氷河のように冷やかにわずかずつ移り始めていたに違いない。それは、〈鬼の細胞水晶玉には映らない〉と言うように、作者自身も透視も予知もできないものであった。やや大

仰な言い方をすれば、人知を超えた力を備えた魔王のような細胞だったのだ。

しかしながら、現代の医療技術によって、切除の手術はめでたく成功する。冒頭の句は、その後の病室風景かと思う。それまでベッドに横たわっていた作者の体内から「鬼の細胞」がすっかり消えた。そのとき、病室に清浄な空気が戻ったように感じられたのだろう。

改めて、シートの白が結界のような威力を発揮する。それは、莊嚴の光で悪霊や疫病を寄せ付けない寺院のようなきびしい純白でもある。形状的にはシートは横たわっているものだが、作者の精神の中ではまばゆい威厳をもって立ち上がったのだ。ひとつ間違えば「死」と通底する病室のシートが、黄金色をもしのぐ純白の光をもって「生」を厳かに烈しく主張した瞬間を作者の詩的感性は見逃さなかった。

ところで、予後の作に〈晩年への関門だった鬼の細胞〉とある。「晩年」への試練を乗り越えた作者を迎えたのは、〈鬼の細胞微塵もあらず朝の王国〉であるという。健やかな「朝の王国」でのさらなる展開が楽しみである。ご加餐を祈りたい。

人の世に巢箱を架けて兜太逝く 津久井紀代

(句集『神のいたずら』・平成三〇年八月・ふらんす堂刊)

津久井さんの最新句集をいただき早速拝見した。作者は、作品も「天為」の中心的存在の一人だが、併せて恩師・有馬朗人の作品批評を丁寧に進めていらっしやる。有馬朗人の世界を知るには欠かせない評論家でもある。

作者の作品の特質は、何よりも次のような感性の行き届いた写生であろう。文体はあくまで平明。〈泉湧くまつくらがりのひとところ〉〈まだ水の色してゐたる初櫻〉〈白梅のいづこに立つも水の音〉〈まだ青き駿河の竹を虫籠に〉等。闇の中に源泉の「ひとところ」を訪ねあてる純粹な好奇心は、夏の闇の中で泉の音と共に心に光り始める。初桜の「いま」の把握には、花びらが独自の色を得てゆく時間も示唆する。三句目は、梅園などでどの木に寄つても春先の清冽なせせらぎの音が聞こえてくる。これら三句には現象の把握のみならず、作者の心のあり方が見えてくる。四句目も、「虫籠」から作者の原風景が引き出されて面白い。

もう一つの作者の特徴は「笑い」にある。たとえば、〈綿虫にぶつかりさうでぶつからぬ〉〈本の帯はらりと虚子の忌なりけり〉〈大虚子も母も駄々つ子椿餅〉〈腕を買はれて虫籠の番人に〉〈初鶏の母呼ぶやうに顔上げて〉等。表題の「神のいたづら」を思わせる綿虫という微小な生命とのかかわりのおかしさ。二句目は、〈どかと解く夏帯に句を書けとこそ虚子〉を想起させる大人の笑いを感じる。三句目、「大虚子」が「駄々つ子」へと流れ落ちる急展開の文脈に置かれた「母」の存在が面白い。「椿餅」は虚子忌である椿寿忌を意識したのか。四句目は〈父と呼びたき番人が棲む林檎園 寺山修司〉などの下敷きを思わせる。林檎園から虫籠の番人への落差が面白い。五句目は意外な発想の中七下五に初鶏のけなげな可笑しさがある。

さて、冒頭の作は、先ごろ長逝された金子兜太への追悼句だが、「巢箱」が明るく意表を突く。たしかに、多くの「巢箱」を架け、分け隔てなく弟子を育てられた。「巢箱」にはそのような含意もあるが、同時に季語的な「春」の息吹に包まれ、春の生命感も同時に引き寄せた句になった。春と共に思ひ出される忘れ難い追悼句の一つになる。

真孔雀の尾は人日の地を均す 星野いのり

(全国俳誌協会・新人賞受賞作より)

今年度の新人賞は星野いのりさんに決まった。全国俳誌協会では、

新人賞の選者に思い切って実力派の神野紗希に加えて、赤羽根めぐみ日野百草という昨今新人賞を獲得している若い作家三名をお願いした。これが功を奏したのか、全国から二十二名の応募があった。総会当日の相互選者評もオープンにして忌憚のない意見を飛び交わしていたのも、すがすがしい気持ちで拝見した。応募句数は十五句(題名なし)で、他の新人賞と比べると多少応募しやすかったのかもしれない。ただし、十五句ということは最初の句と最後の句の間に展開できる句数は十三句しかないわけで一句の重みは却って重いともいえる。新人賞の星野さんは茨城県日立市から応募されたが、一九九七年生まれなので二十歳。余計なことだが、長身細身のシャープな風貌は、かつての岸本尚毅をふと思わせた。ちなみに、準賞一作・佳作三作から佳品を引いておこう。

行く春の大樹よ私の書架となれ 原 英

掃除機のコード絡まり日雷 甘利大雄

薔薇を切るときにまばたきはできない 井口可奈

ドライヤーかしまし春の夜の会話 姫草尚巳

五年先、十年先、新しい時代の新しい風景はどのように表現されるのか、楽しみにしたい。

さて冒頭の句だが、この「真孔雀」の「真」は、「真澄」「真昼間」などのような強めの飾り言葉ではなく、「真鯉」「真鴨」などと同様に種類名的一部分である。「マクジャク」に対する言葉の違和感はこの事実によってすぐに消えた。東南アジアや南アジアに広く生息し、最大全長三メートルとなるそうだ。もちろん、この句の季語は「人日」。正月の淑気はまだ漂うなかで、孔雀が重く大きな尾をまだひらかず、地を引きずっている。それを「地を均す」と表現されたのだろう。やがて、孔雀の尾は地から離れ、大きくひらいて見物客を楽しませる。孔雀の地味な在り方の時間を的確に詠み切ったところに惹かれた。他にも「梅園を地割れの如く枝の影」(ひざらしや裏の真白き蓮青葉)へ開かれて内の艶めく桃の缶)「流燈の千の瞬く富士の風」(石室の入口 濁きゐる枯野)などにも注目した。将来が楽しみだ。

でんでんむしや思考の果てに螺旋の家 橋本夢道

(一九四八年・句集『人心巨木』より)

四月下旬に信州の上田に出かけた。実は、無言館の近くに建立された「俳句弾圧不忘の碑」(金子兜太揮毫、筆頭呼びかけ人…金子兜太、窪島誠一郎、マブソン青眼)の二月の除幕式に出席できなかつたので「檻の俳句館」での句会と併せてゆつくり訪ねてみようと思いついたのだった。

その折、マブソンさんから頂戴した本が、『橋本夢道物語 妻よおまえはなぜこんなに可愛いんだろうね』(二〇一〇年刊行・殿岡駿星著・勝どき書房)という一冊だった。破天荒な生き方をした夢道の俳句を時代順に追いながらの評伝だが、その生き方が生々しく伝わってきて、破格に面白い。著者は夢道の娘婿で昔朝日新聞記者。綿密な資料調査に加えて、筆も立つし筋も予想外の連続に惹き込まれ続けた。夢道の俳句は自由律だ。〈せつなくて畳におちる女のなみだを叱るまい〉〈総身にルビー残して一糸もなし〉〈もろもろの悩みを捨てて妊りにいる妻を愛す〉など恋愛や愛妻俳句も多い。愛情や愛欲に関する

正直な表現はときに露にすぎる時もあるが、大方は若い人らしく自由で微笑ましい。

一方、プロレタリア俳句弾圧で二年一か月の獄中生活を強いられた夢道には、〈渡満部隊をぶち込んでぐつとのめり出した動輪〉〈吾子の咳する夢からさめているのも獄〉〈大戦起るこの日のために獄をたまわる〉〈獄にいて妻を気丈に思う冬のきびしさ〉〈人のいい獄吏枯芝の中にすみれが咲いている〉など当時の社会や人間を見つめた佳品も残る。

さらに戦後も極貧の毎日だったが、〈無礼なる妻よ毎日馬鹿げたものを食わしむ〉〈あれを混ぜこれを混ぜ飢餓食造る妻天才〉〈妻の留守に押入れをのぞき驚き飢餓日記〉などは、逆説的表現が痛みを笑いに軽やかに転じて逞しい。

ところで、冒頭掲出の句は、昭和二十三年(四十五歳)の折の作とされるが、自らを蝸牛に仮託して、その思考の果てが蝸牛の殻のような「螺旋の家」であるという。堂々巡りの中にも少しづつ上昇してゆく未来性を感じられる。暗喩性の強い代表句の一つであろう。夢道はその「螺旋の家」を根拠に俳句を詠み、家族を愛し続けた。

後半生の作品はまた次回に触れよう。

生涯に一度柩に入れば春

宮坂静生

(「岳」「俳句界」二〇一八年四月号)

一見、金子兜太長逝を寿ぐかのような心豊かな鎮魂歌。「生の人間が生の言葉を率直に語る」俳句と共に、兜太ほど皆に愛され惜しまれ、生々しい無垢な光を残して大往生した俳人も珍しい。私自身が訃報を知ったのは、アジアンクルーズ船で寄港したインドネシアの小島の小高い山を登っている時だった。俳句教室の講師として三週間ほど乗船したのだった。山頂から小さな町を見渡し、瀬戸内海のような穏やかな光を抱いた海に平安なひとときを過ごした。金子兜太の戦中過ごしたトラック島は、この海のずっと東方にあるが、悲惨を極めた日常であったことであろう。

それから七十年後、平和と反戦を主張し続けながら、この句のように天寿を全うして柩に入れられ、秩父の地霊に春の光まみれになる程に抱かれた。永遠の春の世界に再び生き始めたのだ。昨年十一月の現代俳句協会七十周年記念祝賀会の折にご本人が披露された秩父音頭のやわらかな声は、その先ぶれのように私の心には溶け込んでいた。

さて、「岳」四月号には、「俳句界」四月号発表作五十句の中から金子兜太への鎮魂歌「魄の行方―悼 金子兜太」三十句が転載されている。兜太の死後の「魄」のあり方を自らの死生観に沿いながら追求した、思索と想像力の豊かな追悼作となっていることが特記される。

〈春の猪出合頭に兜太の目〉〈太陽は膨らみつゞく山鯨〉〈老子ほどの大き息吸ふ春の人〉に始まり、上掲句や〈雛よりも兜太色白涅槃変〉〈柩から雲雀とびたつために窓〉を中ほどに配し、〈己が焼かれ秩父の山火夜もすがら〉〈兜太いま地中のマグマ下萌ゆる〉〈囀の彼岸へ兜太着ける頃〉と深々とした世界へ兜太を見送る。転生観を底敷きにした生命感あふれる追悼句と言ってもよい。

晩年アニミズム俳句や生きもの諷詠を主唱した兜太の凶太く奔放な野性も、地貌の中に魄のあり方を問うてきた作者の世界と大きく響き合っていたことを改めて知った。「独自のアニミズムに基づく宇宙観にも万物の存在を貫く『戦争拒否・平和探求』の生々しさがあり、共感を呼んだ。」(宮坂静生…現代俳句協会コメント)との通りだと思ふ。

徒夢を白き兎にかこまれる 塩野谷 仁

(句集『夢祝』平成三十年・邑書林刊)

本句集は作者の第八句集。近作四年分を収録している。

白は作者の好きな色だ。〈こんなにも月に離れて白蜀葵〉〈にわとりが白く吹かれている晩夏〉〈天竺はきつとこの奥白障子〉〈分別のなき日なり蝶真白なり〉〈地の涯と思う白百日紅散れば〉〈木槿白花終らないつらねうた〉〈野火走る落日はまだ白きまま〉〈十一月蝶白し痛棒のごとく〉など、終焉と接する境界意識を引き出す色なのかもしれない。白と言えば「昼月」も多い。〈寒鯉に乗れば昼月まで行ける〉〈藻の花にまぬがれ難く昼の月〉〈木々枯れて昼月という穴ひとつ〉〈木五倍子咲き誤植のごとく昼の月〉〈うしろにもある逃水と昼の月〉〈昼月夜きつとあふれる沼がある〉など、こちらは薄い白色を思わせる。

もう一つよく出るのが「鏡」だ。〈つばくらめ鏡は一度しか割れず〉〈鳥帰る鏡ひとつを置き忘れ〉〈雁渡る夜は鏡のなか覗く〉〈春いちばん鏡盗人きつと来る〉〈誰かまた鏡をひらく鳥ぐもり〉など、虚あるいは死の世界に通じる現実を意識させる。自家薬籠中の素材を柔軟

に展開している。

さて、冒頭の作は、不思議な感触を伝える。徒夢(あだゆめ)とははかなくむなし夢のような在り方を言うのであろうが、白い兎に囲まれていと言うのだ。白い兎は一羽や二羽ではなく、金子兜太の〈梅咲いて庭中に鯨が来ている〉の鯨までは多くないにしても、かなりの数いるはずだ。兎と言えばふつうは白いものをまずは思い浮かべるが、作者はあえて「白」という形容語を加えた。「兎」については、「徒夢」と併せて捉えると、〈夏草やつはものどもが夢のあと 芭蕉〉を思わせる。「徒夢」なのかもしれない。そのことに思いを馳せると、兎のまぶしく柔らかだった「白」は反転して生気を失う。集中の〈六月のきれいな兎に逢いにゆく〉と対にして味わいたいような句だ。

尚、この句集には、〈懐手いま深海の火山噴く〉〈初夢の大河どこまでも泳げる〉〈水も木も傷もゆきずり虹二重〉〈身にふかく王国のあり藪柑子〉〈生い立ちの川にあふるる昼寢覚〉〈ついに灯らぬ芒野を持ち歩く〉など個人的感情が大きな空間意識へとつながる佳品が多く特に共感した。

水仙と同じ高さの心電図 日野百草

(句集『無中心』平成三十年・第三書房刊)

句集名の「無中心」が意味深長なことは察しがつく。作者自ら述べているように、河東碧梧桐の「無中心論」に由来するとの由。全国俳誌協会賞の「受賞の言葉」の中では、「俳句としての抒情性」と「共感性を核とした生命諷詠」を主張。秋尾敏は、「虚構の構成力」「世界を作り出す力」を認め、加えて「行き過ぎた〈近代的自我〉が陥った人間〈中心〉自己〈中心〉の思想を日野は〈無中心〉という概念によって乗り越えようとしている」と作者の俳句観を的確に見抜いている。句集では、受賞作二十句を巻末に「過去帳」として置くが、その他は季節順に章分けなしで一氣に百八十四句を載せる。「過去帳」には、〈出稼ぎの父春泥を押し戻す〉〈石垣の乱るるままの斑雪かな〉〈死も何時かこの蟻蠓に覆はるる〉〈音一つ二つ誘蛾の灯と消ゆる〉〈過去帳は苗代菜黄の色かとも〉〈山神に火粉を飛ばし櫓を焚く〉〈玉砕の島より鷺の羽ばたけり〉など引くにさすがに力作が多い。俳句の器の中で、いずれもさまざまな生命感が同等に瑞々しく現れている。

一方、「過去帳」以外の俳句の中にも、〈春泥や周り気にせず跳んで

みる〉〈鮎波みに飛び込んでくる童子かな〉〈心臓の音を隠さぬ子猫かな〉〈父の忌に嫌ひな父と会ふ麦秋〉〈山となる羽蟻の隠したる何か〉〈蟻を見て引き返したる蟻もゐて〉〈ガマ深く葉莢を抱く大百足〉〈いつしかに虹の原発バラライカ〉〈水鉄砲打たれる前に抱きしめる〉〈あの日から国は嘘つき生身魂〉〈我が胸の月を無月に映しけり〉〈武器もなく立たされてゐる案山子かな〉〈軍艦の肉づき寂し冬の波〉〈店番の子が泣いてゐる飾壳〉など社会批評も交えて、枚挙にいとまがない。そして、章末の方に心筋梗塞で入院した句が並ぶが、上掲の句はその一つ。心電図の近くあるいは窓辺にでも水仙の花が活けられていたか。あるいは、心電図の波の高さが水仙の丈と同じくらいということか。ディテールは多少あいまいだが、緊急事態に及んでいる自分の命を否応なく可視化する心電図に対して、清らかな水仙(できれば雪中花のような日本水仙がいい)を感受したところに、迫るような純粹感情と諧謔味が伝わってくる。無機質な心電図に水仙の花が添うことで、自分の命も蘇るよすがができたような気がしたかもしれない。もっとも、「心筋梗塞で死にかけて、心臓の半分が壊死した身となり、いつやも知れぬ今生を鑑みて、わずか句歴三年で句集を出すに到った」とのこと。俳句への平等なまなざしから生まれるさらなる地平の広がり期待したい。くれぐれもご自愛專一に。

長征の途中に虹を詠じけり 日原 傳

（句集『燕京』ふらんす堂刊）

この句集については「秋」十二月号で齋藤雅美さんが書評を担当してくださった。そのときにも引用された句だが、年の暮に何度となく読み直してみて、本句集のよさを改めて認識した。ちなみにマイフェバ十句を引くと、〈新しき鯉を入れたる雪解水〉〈春風や明器の鳥をいつくしみ〉〈獣骨を磨きて虫の籠とせる〉〈古木にて道は曲がりぬ豊の秋〉〈歩きつつ冠に編む柳かな〉〈長征の途中に虹を詠じけり〉〈蝌蚪の押す木片やがて廻りだす〉〈東せる西せる亀や放生会〉〈孔廟の空に吹かるる蛇の衣〉〈暑きゆゑ少しおろかに暮しをり〉など。他にも見逃せない中国生活の句が数多ある。

さて、上掲の句だが、「長征」は一般的な語義としては「遠方へ行くこと。また、遠方へ征伐におもむくこと」。古くは盛唐の詩人王昌齡の「出塞」に「秦時明月漢時関、万里長征人未還」とある（『日本国語大辞典（第二版）』）。

そして、この語が現代的な意味を持つようになるのは、齋

藤さんも言及されたように、一九三四年から三六年にかけて、毛沢東らの紅軍（中国共産党）が逃げるように国民党軍と交戦しながら強行した、江西省瑞金から陝西省延安までの一万二千五百キロの行軍による。約二年にわたる大移動で、全軍三十万人の兵力を三万人にまで減らしたと言われる。多大な犠牲を伴った大叙事詩である。

日原さんの句を詠むと、「長征」には、この共産党軍の行軍はもちろんのこと、その奥に昔からの多様な「長征」を重ねているように感じる。普遍的な「長征」の姿である。長征とはいつの世も辛苦に満ちた大難儀だ。長征を遂げても「万里長征人未還」という運命が待つことも多い。長征途次の兵士の心中を慮っていたとき、ふと虹が出た。その瞬間、日原さんは「虹を詠じた兵士もいた」と断じたのである。苦難の中でも人間は虹を愛で詠じる。人間と詩の関係の根本だ。時間を超えた美しい刹那的な虹である。

この句は不思議な実感を伴う。それは切字としての詠嘆の「けり」である。過去の出来事への共感を「いま」へ強く引き寄せる。歴史ドラマの登場人物になりきって自ら詠じているような現実味が伝わってくるのである。